前号を読んで

大学の将来と「大学の人間」

星野豊
社会科学系助教授

前号の特集は、「筑波大学の将来設計」シリーズ第3弾としての「センターにおける教育・研究」であった。教職員併せて約4000名とも言われる本学の組織はやはり巨大なものであり、紹介されている数多くのセンターの中には、恥ずかしながら私がこれまで存在を知らなかったセンターもいくつかあったことを、まず正直に申し上げ、当該センターの方々にお詫びしたい。

各センターの教育・研究の現状と、今後の展望ないし問題提起については、それぞれのセンターで行われていることが高度に専門化している筈であるにもかかわらず、専門外の読者にとっても十分理解できるよう、話題提供についても、結論についても、あるいは表現についても、様々な工夫が凝らされていた。この点も、私がふだん書いている文章のことを思いだし、反省の材料とした次第である。

しかしながら、読み終わって気になったことがないわけではない。各センターからの紹介あるいは提言を読んでいく中で、これらの紹介、提言が、各々異なる分野の異なる考え方を持っている筈の複数の方々によって執筆されているということを、私はついつい忘れそうになってしまった。要するに、各センターにおける専門分野の違い以外のものが、少なくとも個々の文章の中からは、それ程明確に感じ取れなかった、ということである。すなわち、所属がセンターであろうと学群・学系であろうと、一括して「大学の人間」として捉えた場合の特徴が、(おそらく私も含めて)各執筆者の中に、良くも悪くも無意識の前提として存在してしまっているのではなかろうか。

現在の大学が、好むと好まざるとにかかわらず、何らかの「改革」を要求されていることは、否定できない事実である。そして、そのような要求の中には、大学の本来のあり方に逆行している点も多々あるが、私も含めた「大学の人間」が真に反省すべき点もあるような気がする。本学を含めた「大学の将来」がどのようになるのかは想像の限りでないが、「大学の人間」としての自らの体質を反省してみる必要があると考えたことは、少なくとも私にとって前号を読んだ「成果」であったと思う。

(ほしの　ゆたか／民法・信託法・金融法)